

奨励賞

信長・秀吉・家康の城を読み解く

長崎県 木原文太

一 信長の神殿

日本史上、安土城天主ほど豪華華麗かつユニークな城郭は他に存在しない。当時のキリスト教宣教師も「ヨーロッパにもあるとは思えない、とても壮大なもの」と絶賛したことが記録に残っている。

しかし、この天主が安土山の山頂にそびえ立っていたのは、わずか三年の間だけであった。なぜなら本能寺の変の約二週間後、放火によって紅蓮の炎に包まれてその姿を消したからである。その幻の城の全容をなぜ現代の我々が知ることができるのかといえ

ば、愛知産業大学元学長・内藤昌氏が安土城の設計図を発見し、その復元に成功したからだ。

そのよみがえった安土城天主の中で一際目を引くのは、八角形で柱が朱色に塗られた六層の部分と、金箔が貼られた七層の部分だろう。この六層七層部分は実物大で復元され、安土城跡のすぐ近くにある「安土城天主 信長の館」に保存されているのだが、大変に色彩豊かであると同時に个性的な構造になっていることを、見学者は実感することができる。

ところで、この安土城天主の独創的なデザインは信長や小説「火

天の城」の主人公でもある岡部又右衛門などが全て一から考えたものであり、モデルとなった建物は存在しないのだろうか？

私は安土城天主六層のモデルは同じ八角形の建物である法隆寺・夢殿であり、七層のモデルは金閣寺だったのではなかったのだろうか？と想像している。そこには「おれは聖徳太子や足利義満を超越した地上の神だ」という信長の意図が込められていたのではないのだろうか。

「信長は神になろうとしていたんだなんて、あんた何バカみたいなこと言ってるの」という人に対しては、作家の井沢元彦氏が「あなたたちは、日光東照宮を知らないのか？」（英傑の日本史 信長・秀吉・家康編）角川文庫」という言葉で反論している。信長は生前から神になることを宣言し、現人神の天皇家に対抗しようとしたおそらく最初の人物であり、それを真似たからこそ秀吉は豊国大明神に、家康は東照大権現や「神君家康公」になることに成功したのだ。

その信長の後継者として天下を統一したのは豊臣秀吉であるが、秀吉が作った城と言えば「太閤はんの城」として有名な大阪城だろう。実はこの大阪城にもユニークな特徴があるのだ。

二 大阪人の大阪城

現在の大阪城天守閣は三代目の天守閣である。初代は言わずと知れた豊臣秀吉が築き、二代目は豊臣家滅亡後の江戸時代初期に徳川家によって再建されたのだが、すぐに火事で燃えてしまったために長い期間、大坂城には天守閣が存在しなかった。その後、大阪市民の寄付によって昭和六年に鉄筋コンクリートで再建され

たのが現在の天守閣である。

この「豊臣が築き、徳川が成長させ、大阪市民の力によって復活した」大阪城天守閣は戦時中の一トン爆弾の直撃にも耐えた後、今も大阪を代表する建物として多くの人々に親しまれているのだが、よく観察してみると実に奇妙な構造になっていることに私はある時気が付いた。それは一層から四層の部分（白い階層）は二代目の徳川時代の形式で建てられていて、五層（最上階）の部分（黒い階層）は初代の豊臣時代の形式で建てられていることである。これがいかに変な構造であるのかをタワーに例えて説明すると、一階から四階の部分は東京タワーでできていて、最上階部分が通天閣でできているタワーを「大阪タワー」と称して大阪のシンボルにしているようなものだ、と表現すれば分かり易いだろうか。衣装に例えると、上に背広を着て下に袴をはくようなものだ。

ではなぜ、この三代目の大阪城天守閣は上下で統一性のない奇妙な構造になっているのだろうか？

実は簡単なことなのである。この天守閣は「徳川」の上に「豊臣」を乗せることによって、「ウチらは徳川はんよりも、太閤はんの方が好きやねん」という大阪市民の熱烈な思いをストレートに反映しているのである。別の言葉で言い換えると、大阪城天守閣は秀吉という一代の英雄が、いかに大阪市民に人気があるのかを示した記念碑だとも言っているのだ。大阪人が持っているであろうイメージを野球選手に例えれば、さしずめ秀吉が長嶋茂雄で家康が野村克也といったところになるのだろうか。その両者を大胆にも上下に合体させてしまうところが、大阪人のセンスと

いうものなのである。

その秀吉死後に天下を掌握した徳川家康も、江戸城や名古屋城といった巨大な城をいくつも造ったのだが、その中で最も築城当時の面影を残している城は京都の二条城だろう。その二条城にも例によって面白い特徴があるのだ。

三 二条城の秘密

二条城は天守閣こそ落雷で焼失したものの、城の敷地内には数多くの建築物が現存している。その中で最も有名な建物は、修学旅行の観光地として定番になっている二の丸御殿だろう。

私はその二条城二の丸御殿を鑑賞している時に気がついたことがある。それは、二の丸御殿は玄関から奥の部屋に行くに従って、次第に床の高さが階段状に高くなっていくとともに、天井や金具等の飾り付けが豪華あるいは洗練されていく傾向がある、ということだ。

では、なぜ同じ建物内にそのような格の違いを設けたのかといえば、建物は一番偉い人から順番に一番奥の部屋から使っていく、という不文律に基づいているからなのだろう。それに伴い、二の丸御殿は玄関から奥に行くに従って次第に格式と床が上がっていくように作られているのだ。

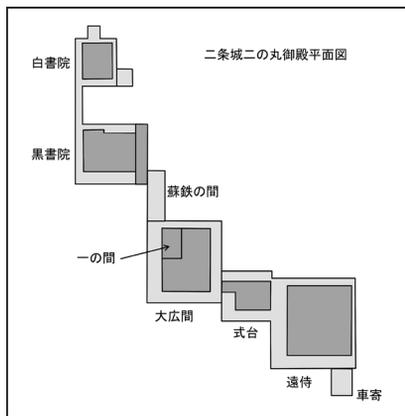
具体的に説明すると、二の丸御殿は手前から奥に向かって車寄（くるまよせ）、遠侍（とおざむらい）、式台（しきだい）、大広間、蘇鉄の間（そてつのま）、黒書院、白書院の順に並んでいるのだが、二条城の公式ホームページ上では、最も格式の高い部屋は大政奉還が行われた大広間の一の間であると書かれている。（図を参照）

しかし外様大名が入

ることができたのは大広間までで、親藩・譜代大名が入ることができたのは黒書院までで、将軍のプライベート空間であった白書院に入る事ができたのは原則、将軍を含むごく一部の人々であったことを考えると、この中で最も「神聖」な部屋は白書院だったのである。何しろ、白書院は二条城の「大奥」なのだから。そして、この建物も手前（車寄）から奥（白書院）に向かって次第に床が高くなっているのである。これは私が現場で目視により確認した。

私事で恐縮だが、私の親戚が住んでいる築二百年の古民家も、仏壇が置いてある部屋は玄関から一番奥で、やはり床が高くなっている。

それから数百年の時を経た現代では、日本人の平均寿命が八十才にも達し、身分の違いをやかましく言う時代ではなくなった。また、鉄筋コンクリートや強化ガラスといった便利な材料も容易に入手できるようになった。そこで住宅や公共施設のバリアフリー化、つまり部屋によって床の高さを変えないように、建物が設計される時代に変化したというわけだ。



四 おわりに

情報の分析において最も重要なことは相手の意図を知ることだ。

これはNHKスペシャルに出演していた人物が番組内で発した言葉なのだが、この発言は「歴史の分析において最も重要なことは当事者の意図を知ることだ」「信長・秀吉・家康の城を鑑賞あるいは分析する際に、最も重要なのは造った人物の意図を知ることだ」と派生させることができるだろう。

その「意図」に気が付くと、現代の我々は戦国乱世の英雄たちや幾多の庶民と時を越えて感情を共有することができると同時に、人間の思考回路や行動様式は今も昔も変わらないことを思い知らされるのである。

その具体例を最後にもう一つだけ紹介しておこう。昭和十三年に完成した愛知県庁舎は、鉄筋コンクリート製で地上六階建ての建物の上にお城を連想させるような屋根が乗っているが（帝冠様式と呼ばれる）、このユニークな建物を設計した意図は何かといえ……いや、慧眼な読者と名古屋市民の方々にはこれ以上の説明は不要だろう。なにしろ解答は「庁舎のすぐ目の前にある」のだから。

